

令和4年度 「富士山と防災についてのアンケート」まとめ



- 1 実施主体 富士河口湖町立教育センター
- 2 実施目的 町内に住む子どもたちの、富士山に関する知識と防災についての意識等を把握し、これからの富士山学習の基礎資料とする。
- 3 実施対象 富士河口湖町内および鳴沢村の小学校3年生・5年生・中学1年生・2年生・3年生
(回答数) 小学校3年生 252名
小学校5年生 273名
中学校1年生 205名
中学校2年生 234名
中学校3年生 207名
- 4 実施時期 2022年(令和4年) 5月, 6月

本報告書の構成

P3 令和4年度アンケートの概要

今年度の小学校3年生、5年生、中学2年生の結果をまとめた。

P4～P13 令和4年度の結果と令和2年度の結果の比較

2回分を並べて比較したデータの後ろのページに「結果と考察」のページをつけた。

1. 富士山の成り立ちについて
2. 富士山の近くに住んでいてよかったこと
3. 富士山の近くに住んでいて心配なこと
- 4①. 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか
- 4②. 富士山が噴火したときどうしたらよいか
5. 知っている火山の言葉を答える(中学2年)
6. 富士山が日本一高くなった理由を知っているか(中学2年)

P14～P25 2年間での変化を見る

前回と今回アンケートに回答して2つの学年のデータを比較した

- ・令和2年度の小学3年生(令和4年度の小学5年生)
 - ・令和2年度の小学5年生(令和4年度の中学1年生)
1. 富士山の成り立ちについて
 2. 富士山の近くに住んでいてよかったこと
 3. 富士山の近くに住んでいて心配なこと
 - 4①. 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか
 - 4②. 富士山が噴火したときどうしたらよいか

P26～P32 令和4年度 中学1年、2年、3年の違いをみる。

噴火の知識や防災の考え方について、中学校でどのような傾向があるのかをみた

1. 富士山の成り立ちについて
2. 富士山の近くに住んでいてよかったこと
3. 知っている火山の言葉を答える
4. 富士山が日本一高くなった理由をしっているか
5. 富士山の近くに住んでいて心配なこと
6. 富士山が噴火したときどうしたらよいか
7. 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか

P33 あとがき

令和4年度 アンケート結果の概要

富士河口湖町の子どもたちの考える富士山の成り立ちおよび世界遺産についての考えは以下の通りである。

富士山が世界文化遺産であることについて<小学5年生、中学2年生>

- ・ 8割の児童生徒が世界文化遺産であると答えている。
- ・ 2割の児童生徒が世界自然遺産であると答えている。

富士山の近くに住んでいてよかったこと

- ・ 3つの学年に共通して以下の4点が多かった
 - いつでも富士山が見られること
 - 自然が豊かなこと
 - 水が美味しいこと
 - 景色が良いこと

富士山の近くに住んでいて心配なこと

- ・ 「噴火するかもしれない」「溶岩流が流れてくるかもしれない」等、富士山の噴火に関わる危険について意識が高いことを示す結果となった。

富士山の成り立ちについて

- ・ 小学校5年生以上では、およそ9割の児童生徒が、富士山が活火山であり噴火を繰り返して高くなったことを理解している。

火山防災について

- ・ 小学校5年生以上では、およそ9割の児童生徒が、富士山は今後も噴火をすると考えている。
- ・ 災害の中で噴火、噴石、火山灰、溶岩流といった、火山現象に関しての関心が高く、8割以上はこれらが起こるかもしれないと考えている。
- ・ 富士山が噴火した際のことについて、家族で話し合ったことがある家庭は全体の半数にとどまっている。
- ・ 富士山が噴火したときどうすればよいかについて、学年が上がるにつれて「聞いたことがある」と回答した児童生徒の割合も上がっている。

火山現象に関する言葉について<中学2年>

- ・ 8項目中6項目について知っていると答えている。

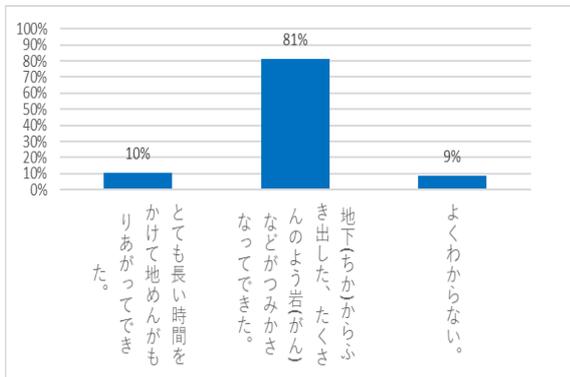
富士山が日本一高くなった理由について<中学2年>

- ・ 3割の生徒が知っていると答えている。

質問1 富士山の成り立ちについて

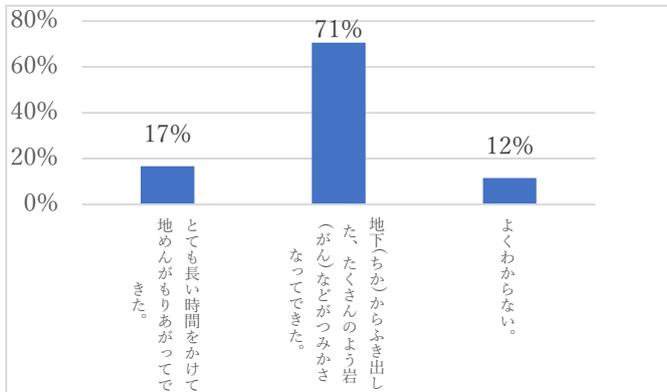
令和2年度

小学校3年生

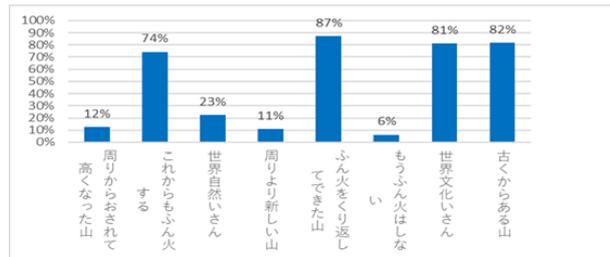


令和4年度

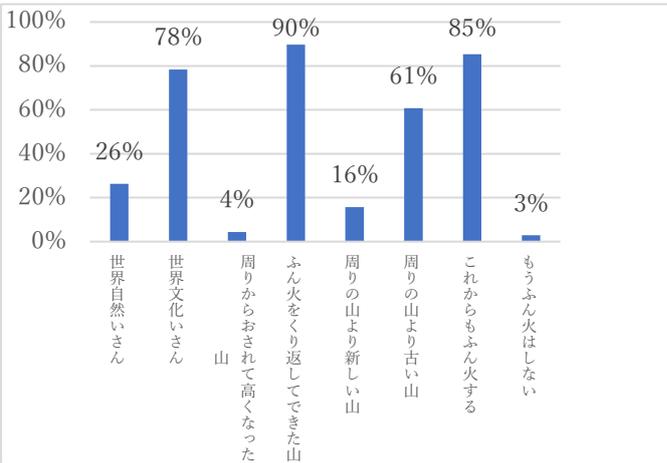
小学校3年生



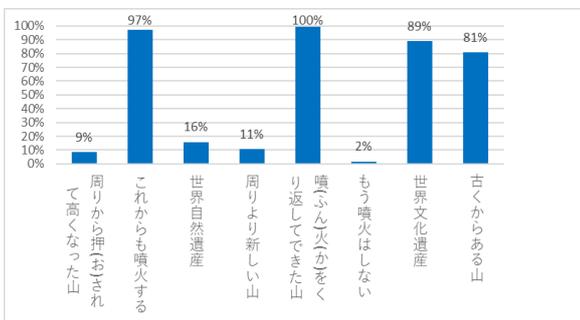
小学校5年生



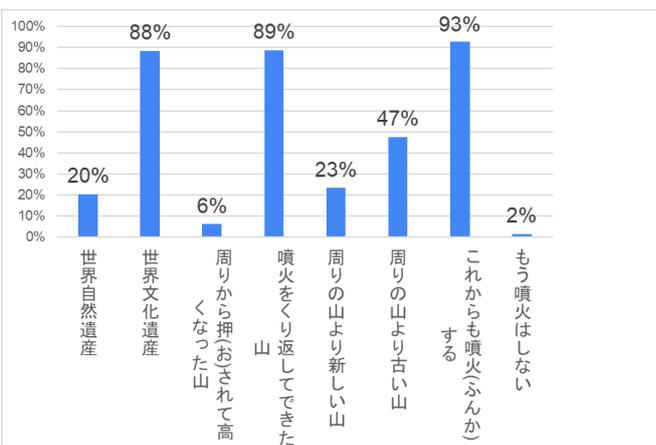
小学校5年生



中学校2年生



中学2年生



今年度(令和4年度)の結果と令和2年度との比較

1. 富士山の成り立ちについて

富士河口湖町の子供達の考える富士山の成り立ちおよび世界遺産についての考えは以下の通りである。

<小学校3年生>

- ・7割の児童は富士山が噴火によってできたと考えている。

<小学校5年生>

- ・およそ9割の児童は富士山が噴火によってでき、今後も噴火すると考えている。
- ・およそ8割の児童が富士山が世界文化遺産であると考えている。
- ・およそ8割の児童が、富士山が周囲の山より古くからある山であると考えている。

<中学校2年生>

- ・およそ9割の児童は富士山が噴火によってでき、今後も噴火すると考えている。
- ・およそ9割の児童が富士山が世界文化遺産であると考えている。
- ・およそ8割の児童が、富士山が周囲の山より古くからある山であると考えている。

<その他>

- ・富士山が世界自然遺産であると答えている5年生、中学校2年生が2割以上いる。(複数回答のため)

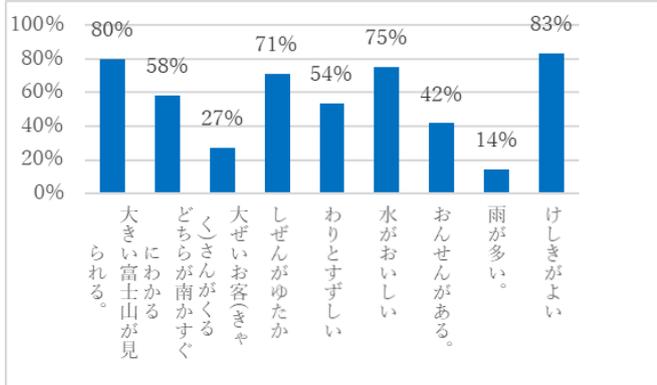
2年前に実施したアンケートとの比較

- ・富士山が噴火によってできたと答えた3年生の割合が、2年前と比べて1割低下している。回答した子供達が違うため、集団による違いといえるかもしれない。

質問2 富士山の近くに住んでいてよかったこと

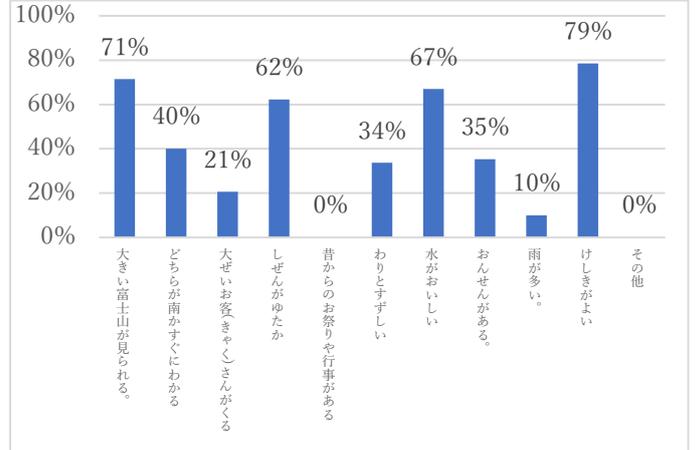
令和2年度

小学3年生

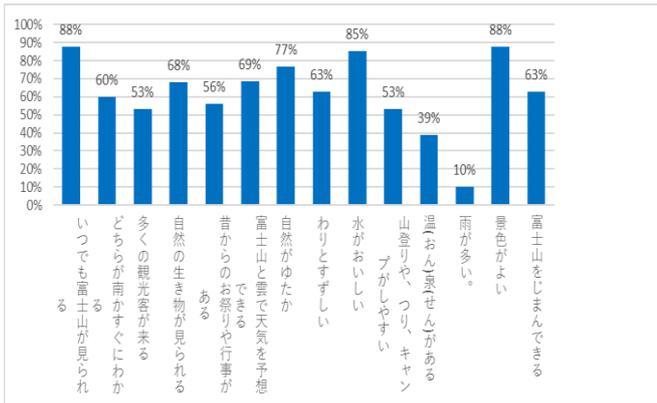


令和4年度

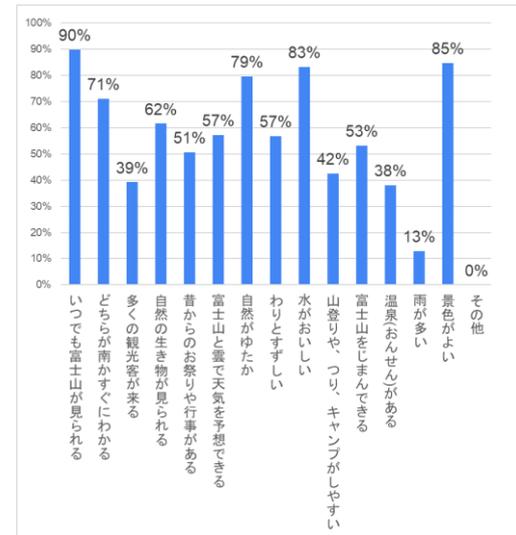
小学3年生



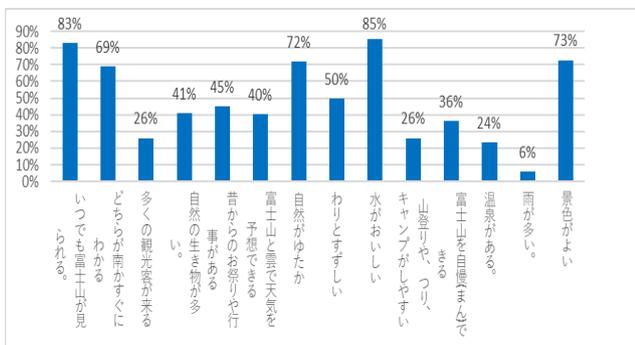
小学5年生



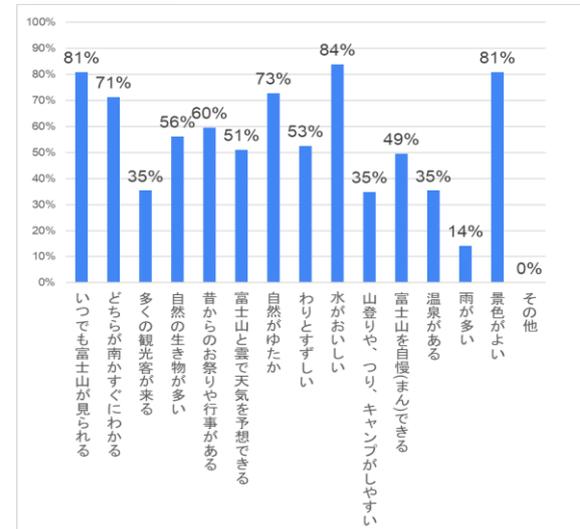
小学5年生



中学2年生



中学2年生



今年度(令和4年度)の結果と令和2年度との比較

2. 富士山の近くに住んでいてよかったこと

<3つの学年共通>

- ・3つの学年が3つとも同じ傾向を示した。
- ・3つの学年に共通して、次の4項目をあげる児童生徒が多かった。

○いつでも富士山が見られること

○自然が豊かなこと

○水が美味しいこと

○景色が良いこと

富士山を世界自然遺産であると考えている児童が一定数いることも踏まえ、また、子どもの頃の思いや経験がふるさとのイメージを育むことから、町民・村民としてのアイデンティティの土台はここにあるといえるのではないかと。ただ、質問項目が自然環境を示すものに偏っており、社会面・文化面についての考えを問うことは今回のアンケートではできていない。

<回答の傾向>

- ・複数回答を可能としたアンケートの傾向として、3年生が最も回答の割合が低い。発達段階によるものといえるが、年齢順に回答の割合が上がっているのではなく、5年生の回答が最も多くなり、中学2年生になると数値が下がっている。地域を学習の場としているのが5年生であり、特に林間学校などで学んだばかりであることから、地域のよさに対して意識が高まっていることが考えられる。

・

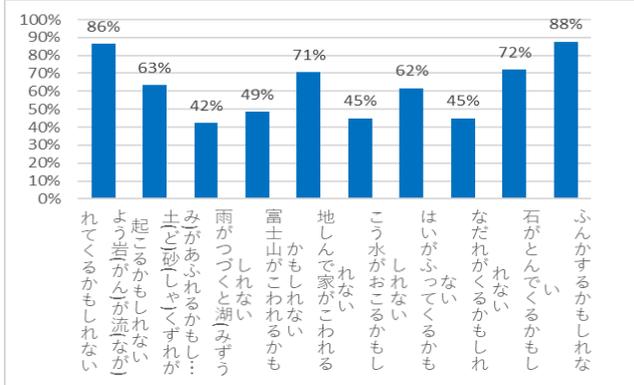
2年前に実施したアンケートとの比較

- ・質問1と同様、3年生の回答割合が少ない。
- ・3年生と5年生で観光客の多さを回答した割合の減少が見られる。コロナ禍の影響かもしれない。
- ・3つの学年とも2年前と大きな違いはなく、しかも3つの学年の回答に共通性がある。全てにチェックを入れることはなく、優先順位をつけていると考え、町や村の子ども達が共通して持っている町・村の良さが浮かび上がっているといえる。

質問3 富士山の近くに住んでいて心配なこと

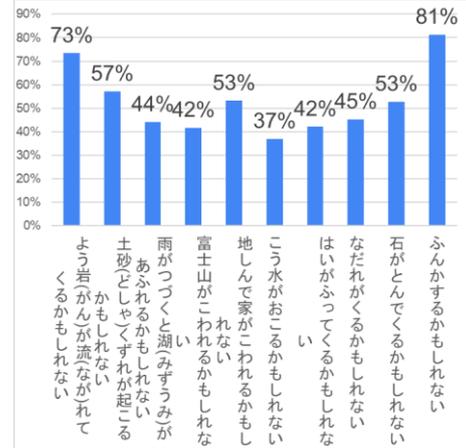
令和2年度

小学3年生

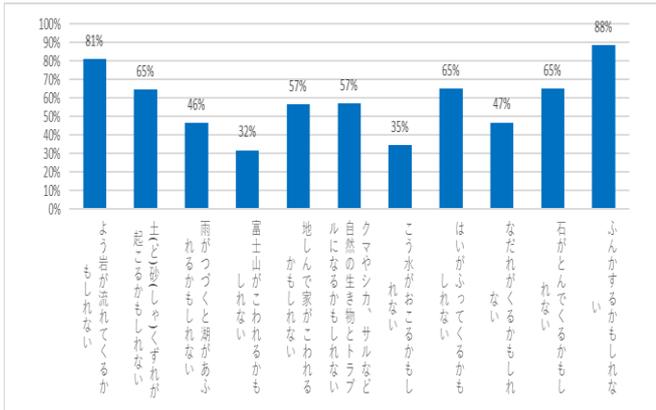


令和4年度

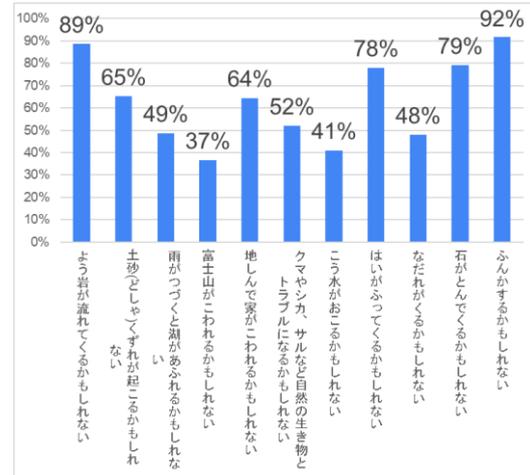
小学3年生



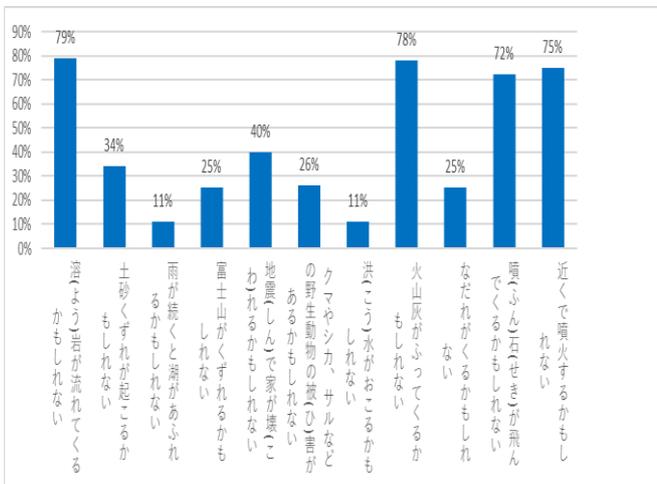
小学5年生



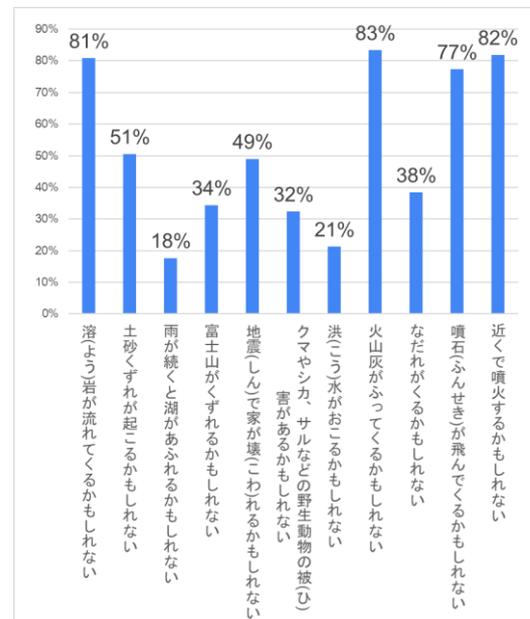
小学5年生



中学2年生



中学2年生



今年度(令和4年度)の結果と令和2年度との比較

3. 富士山の近くに住んでいて心配なこと

<3つの学年共通>

- ・「噴火するかもしれない」「溶岩流が流れてくるかもしれない」等、富士山の噴火に関わる危険について意識が高いことを示す結果となった。
- ・3年生はまだ噴火について具体的に学んでいないため先の2項目のみ関心が高かったが、5年生になると「石が飛んでくるかもしれない」「灰が降ってくるかもしれない」も噴火現象として理解している。4年生の富士山学習で富士山の形と成り立ちについて学んでいる成果の表れかもしれない。なお、この傾向は中学2年でも同様である。
- ・「富士山が崩れるかもしれない」とは、噴火に伴う山体崩壊を示しているが、どの学年も回答数は4割以下にとどまった。学ぶ機会がなかったと考えられる。

<5年生と中学2年生の違い>

- ・富士山の噴火についてはどちらの学年も同じ傾向を示しているが、5年生の方が中学2年生よりも、水害(洪水や湖の水位上昇)や地震、獣害について危険とする割合が減っている。

例えば水害について富士河口湖町と鳴沢村には次のような特徴がある。

- ・富士河口湖町には常に水が流れる川がなく、河口湖の水位も現在は嘯(うそぶき)放水路の完成により大雨にも対応できるようになっている。また湖の北岸地域および浅川地区は土石流警戒区域であるが、湖の南岸は土石流警戒区域はない。地震についても校舎や住宅の耐震化により、被害の軽減が図られている。
- ・鳴沢村も、富士河口湖町と同様に常に流れる川がない。足和田山南麓の山際はほぼ全域が土砂災害警戒区域となっており、大量の降水があった場合には土石流への警戒が必要である。

今回の結果を地域の災害対策について学んできたことのあらわれと解釈することもできる。もし地域で起こり得る災害について、また防災について中学2年生が正しく理解して選択した結果であるとするなら、喜ばしい結果である。

<2年前に実施したアンケートとの比較>

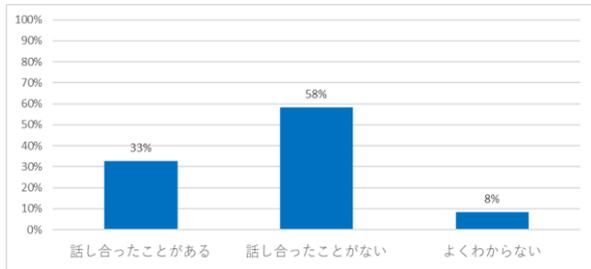
- ・3年生は質問1、質問2と同様回答数が2年前より少ない。
- ・5年生は2年前とほぼ同じ傾向を示した。噴火現象の「降灰」と「噴石」について数値が上がっており、学習の成果と考えられるかもしれない。
- ・中学2年生は2年前と回答の傾向は似ているが、2年前に比べ回答の割合が増えている。先述と重なるが、地域の災害リスクについて学んだ結果の表れといえるかもしれない。

質問4① 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか

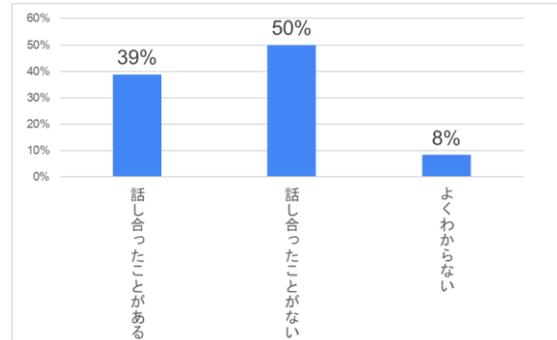
令和2年度

令和4年度

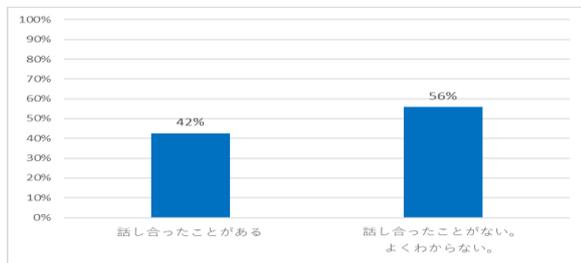
小学3年生



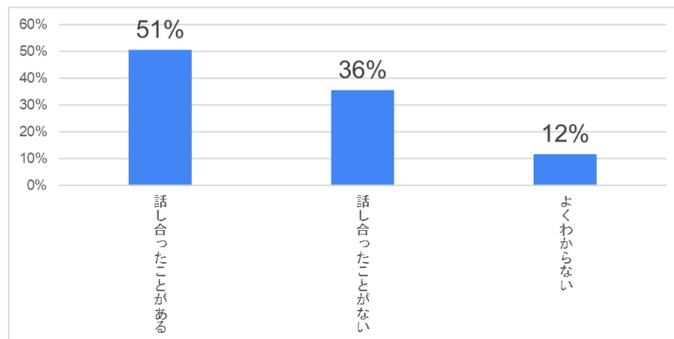
小学3年生



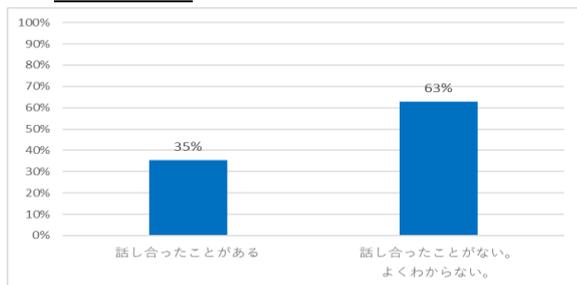
小学5年生



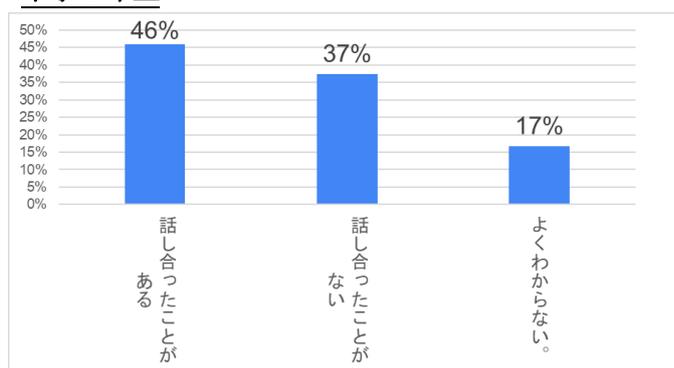
小学5年生



中学2年生



中学2年生

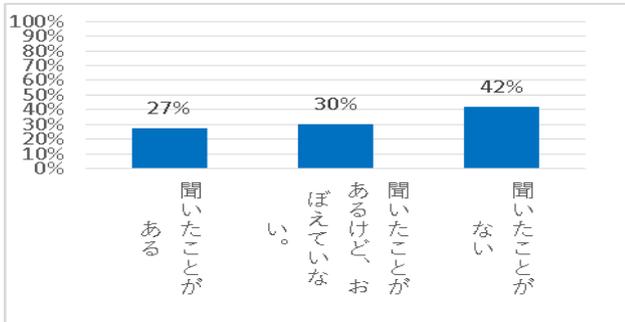


質問4② 富士山が噴火したときどうしたらよいか

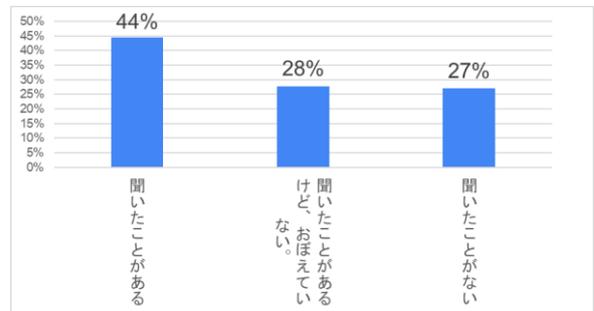
令和2年度

令和4年度

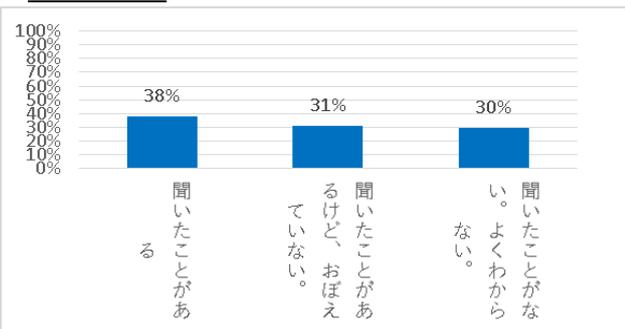
小学3年生



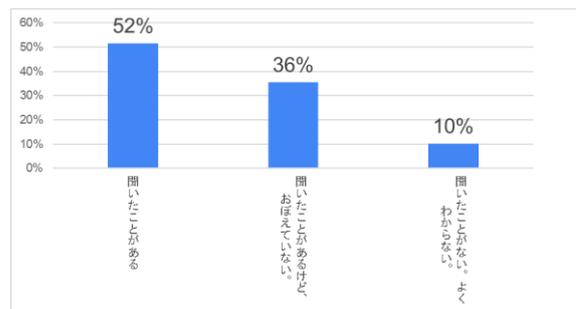
小学3年生



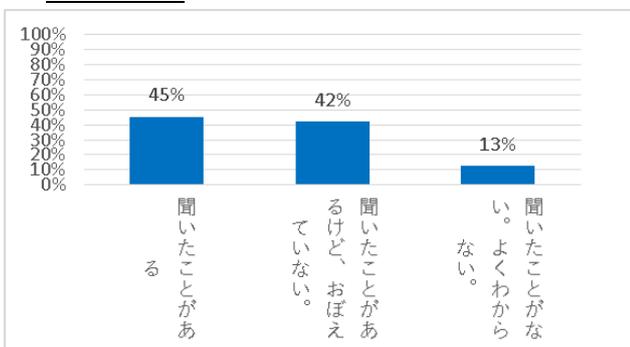
小学5年生



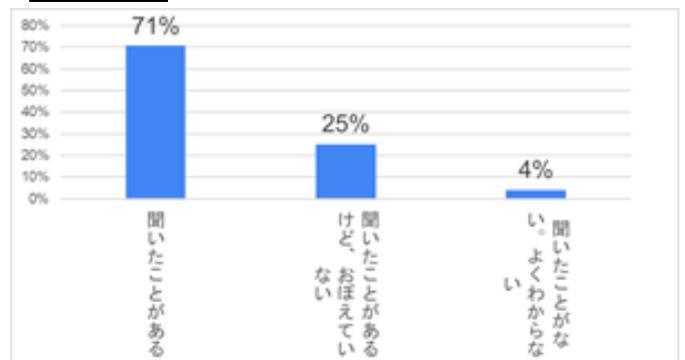
小学5年生



中学2年生



中学2年生



今年度(令和4年度)の結果と令和2年度との比較

4①. 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか。

<小学3年生>

- ・およそ4割の児童が「話し合ったことがある」と回答した。

<小学校5年生>

- ・およそ5割の児童が「話し合ったことがある」と回答した。

<中学2年生>

- ・4割以上の生徒が「話し合ったことがある」と回答した。

<2年前に実施したアンケートとの比較>

- ・2年前1つにまとめていた回答を「話し合ったことがない」と「よくわからない」の2つに分けて回答してもらった。そこで2つの数値を合わせて2年前の結果と比較した。
- ・対象の全学年で「話し合ったことがある」の割合が増加している。上の学年ほど増加傾向が顕著である。

4②. 富士山が噴火した時どうしたらよいか

<小学3年生>

- ・およそ4割の児童が「聞いたことがある」と回答した。聞いたことがない児童の割合が1割以上低下した。

<小学校5年生>

- ・およそ5割の児童が「聞いたことがある」と回答した。聞いたことがない児童の割合が2割以上低下した。

<中学2年生>

- ・およそ7割の生徒が「聞いたことがある」と回答した。聞いたことのない生徒の割合がおよそ1割低下した。

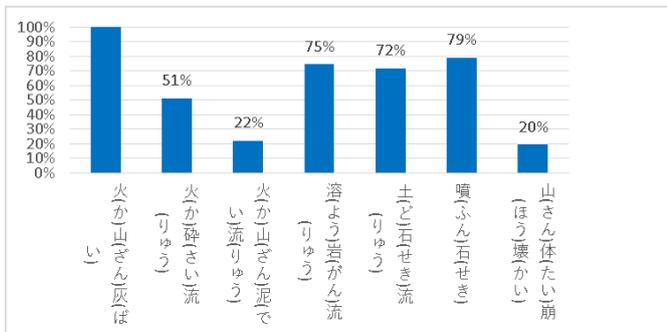
<2年前に実施したアンケートとの比較>

- ・どの学年においても「聞いたことがある」と回答した児童生徒の割合が増加している。特に中学2年生において著しい。火山についての学習が、小学校理科では6年生、中学校理科では1年生に位置づけられている。中学2年生の回答の多さは学ぶ機会があることと関係しているかもしれない。

質問5 知っている火山の言葉を答える。(中学2年)

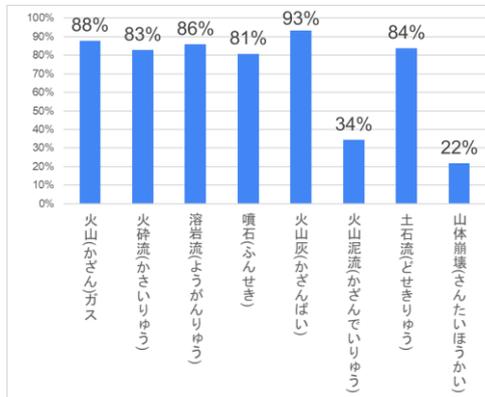
令和2年度

中学2年生



令和4年度

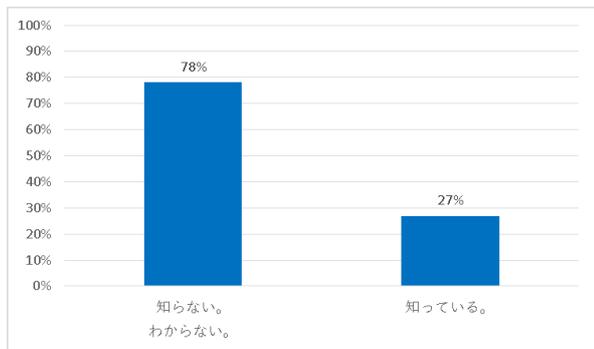
中学2年生



質問6 富士山が日本で一番高い山になった理由を知っているか。(中2のみ)

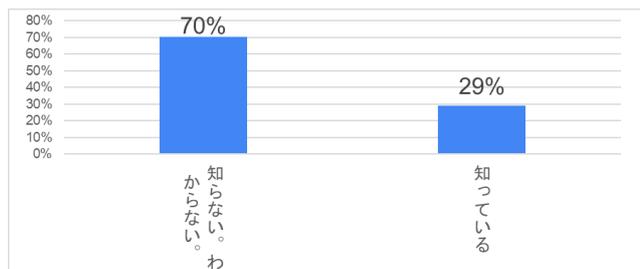
令和2年度

中学2年生



令和4年度

中学2年生



今年度(令和4年度)の結果と令和2年度との比較

5. 知っている火山の言葉を答える(中学2年)

<令和4年度の結果>

- ・8項目中6項目で「知っている」と回答した生徒が8割以上となった。

<2年前に実施したアンケートとの比較>

- ・令和4年度は項目数が1つ増えた。
- ・共通する7項目について、1項目を除いて全て令和4年度の方が知っている割合が増えた。噴火現象について意識的に指導し、また学んでいることがうかがえる。

6. 富士山が日本一高くなった理由を知っているか

(中学2年)

<令和4年度の結果>

- ・およそ3割の生徒が「知っている」と答えた。

<2年前に実施したアンケートとの比較>

- ・ほぼ同じ傾向を示した。
- ・富士山の形成史について現在町内で共有されている資料はなく、授業においても特定の火山について取り上げて指導しているわけではない。富士山について、何をどこまで学ばせるのかという指導のあり方について、専門家にも加わってもらいながら検討していく必要があるのかもしれない。

令和 2 年度と令和 4 年度 2 年間での変化をみる

令和 2 年度

3 年生

5 年生

令和 4 年度

5 年生

中学 1 年生

→

→



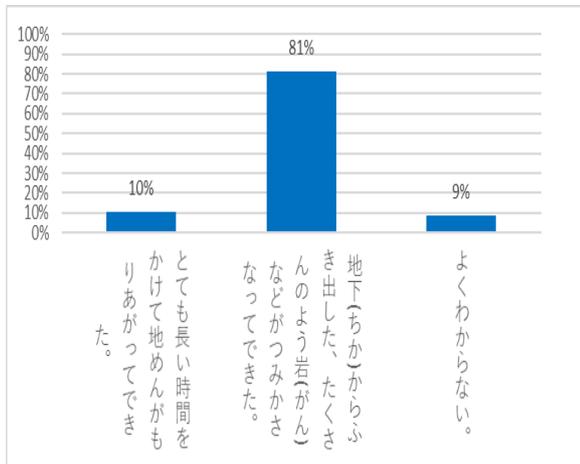
質問1 富士山の成り立ちについて

令和2年度

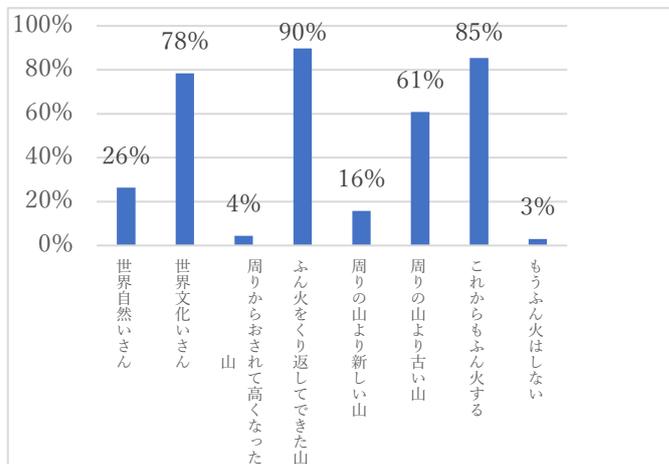


令和4年度

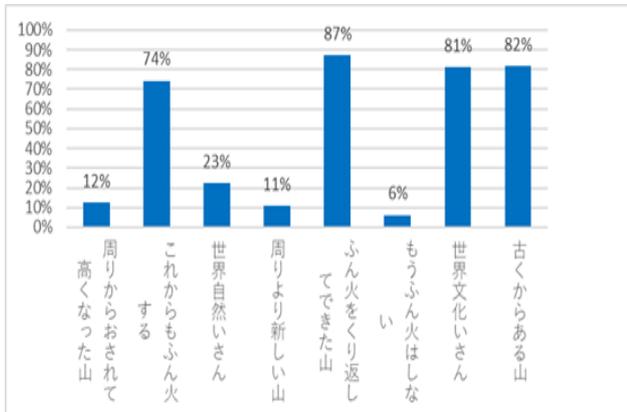
小学3年生



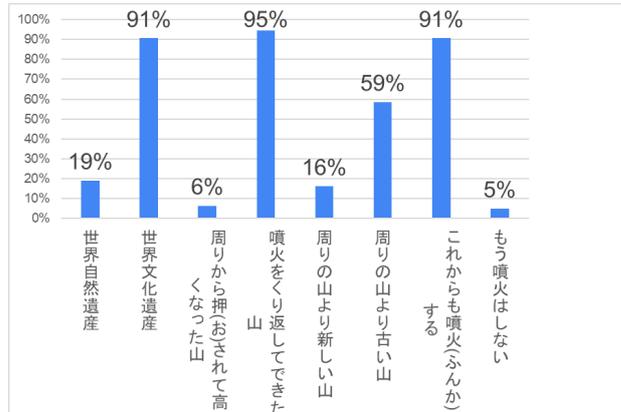
小学5年生



小学5年生



中学1年生



2年間での変化を見る

1. 富士山の成り立ちについて

<小学3年生 → 小学5年生>

- ・富士山が火山であることについて、2年度ですでに8割を超えているが、3年生の時よりも理解している児童が増えている。今後も噴火する可能性があるとして、8割以上の児童が考えている。

<小学5年生 → 中学1年生>

- ・2年前と傾向は同じだが、富士山について正しく理解している生徒の割合が9割以上となった。複数回答を可能にしているため、富士山が世界自然遺産であると2割の生徒が回答した。

<共通>

- ・周りの山よりも新しいか古いかという項目について、問う必要があるか検討したい。地質年代では富士山は新しい山といえるが、児童生徒にとって地質年代のスケールはなじみがなく、また根拠をもって答えられるほど知識を持っているわけでもない。

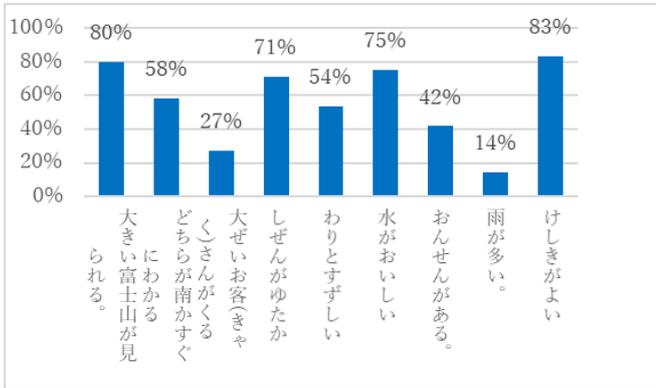
質問2 富士山の近くに住んでいてよかったこと

令和2年度

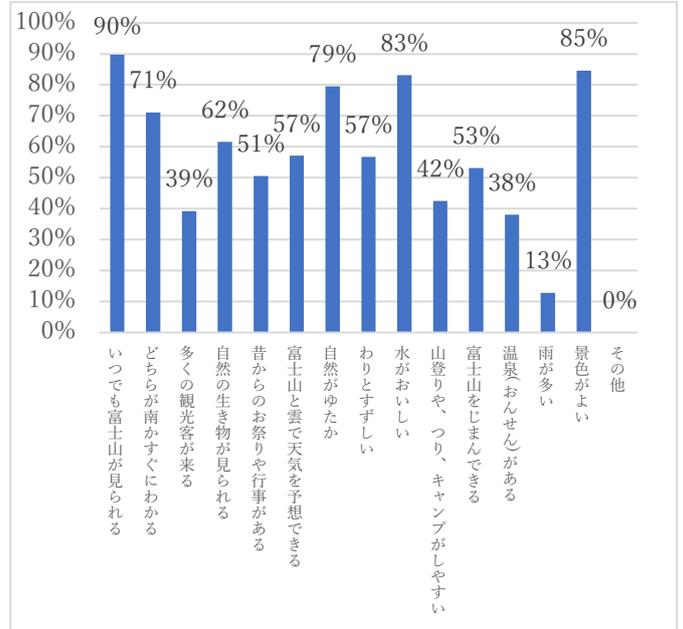


令和4年度

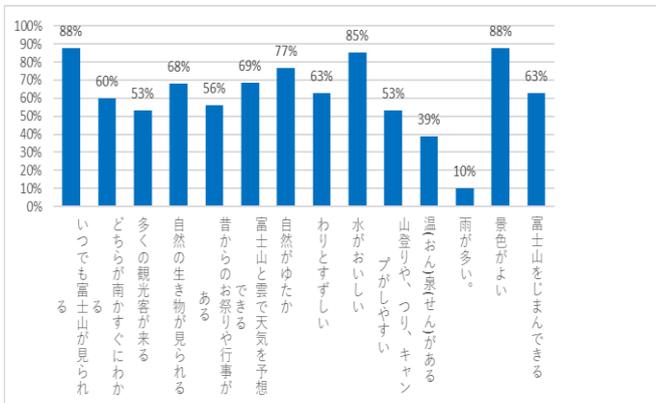
小学3年生



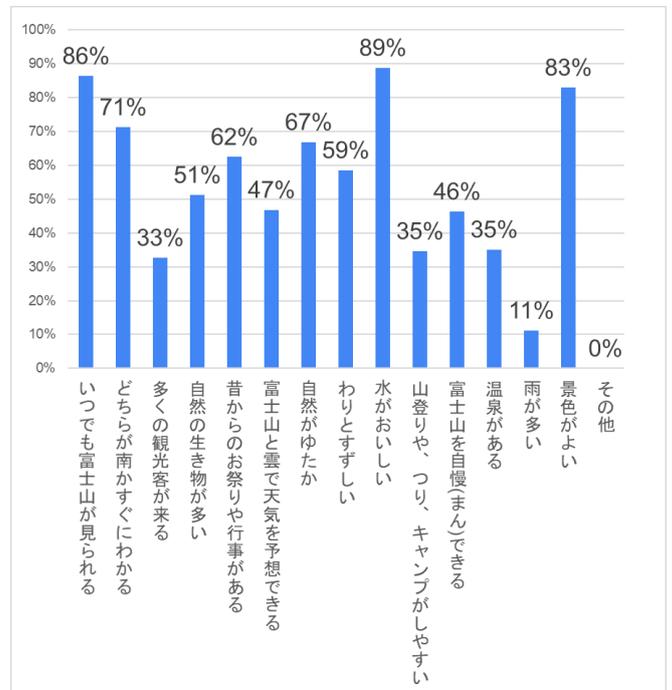
小学5年生



小学5年生



中学1年生



2年間での変化を見る

1. 富士山の近くに住んでよかったこと

<小学3年生 → 小学5年生>

- ・2年前と回答の傾向は同じで、「いつでも富士山が見られる」「自然が豊か」「水がおいしい」「景色が良い」の回答が8割を超えている。
- ・「どちらが南かすぐ分かる」の回答が伸びている。方位についての習熟が進んだためか。
- ・「温泉がある」「雨が多い」以外の項目で回答した割合が増加した。

<小学5年生 → 中学1年生>

- ・2年前と回答の傾向は同じで「いつでも富士山が見られる」「水がおいしい」「景色が良い」の回答が8割を超えている。
- ・「水がおいしい」「どちらが南かすぐ分かる」「昔からのお祭りや行事がある」「雨が多い」以外は2年前より割合が減少した。「多くの観光客が来る」については2割の減少となった。

<共通>

- ・どちらの学年も、2年間で大きく傾向が変わることはない。
- ・回答の割合が少ない項目は共通している。「雨が多い」「温泉がある」「山登りや釣り、キャンプがしやすい」「多くの観光客が来る」の4項目。

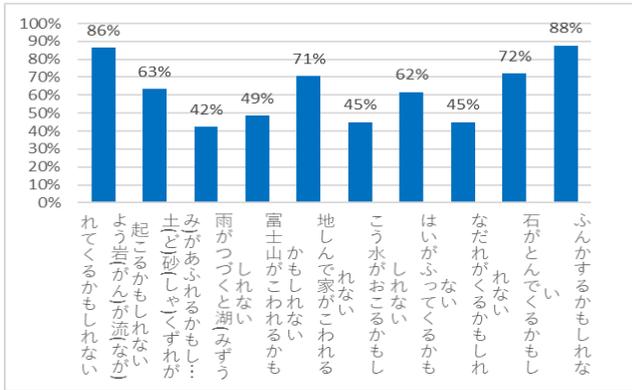
質問3 富士山の近くに住んでいて心配なこと

令和2年度

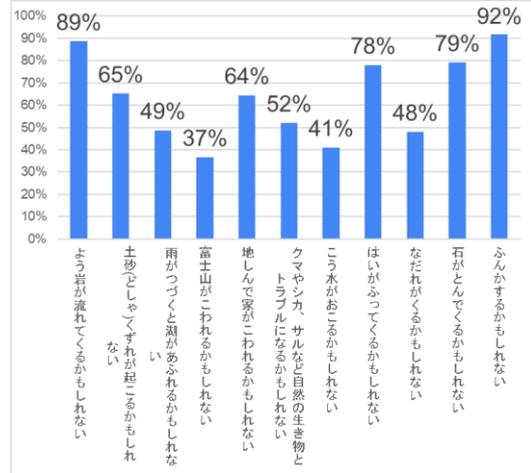


令和4年度

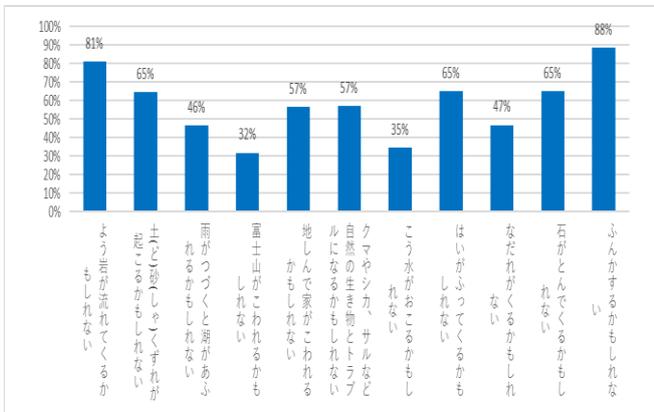
小学3年生



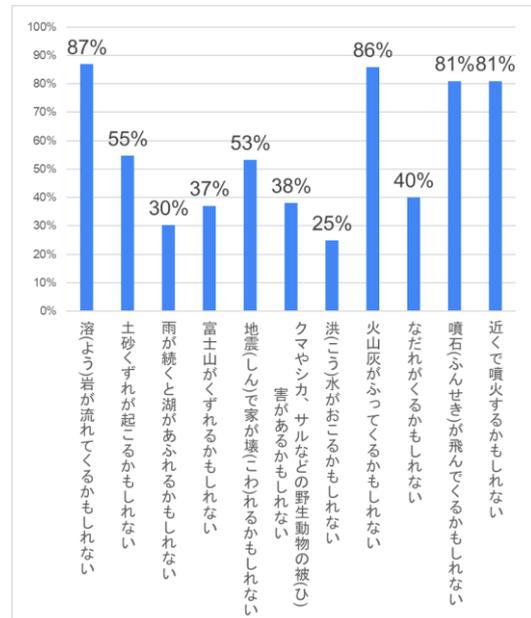
小学5年生



小学5年生



中学1年生



2年間での変化を見る

3. 富士山の近くに住んでいて心配なこと

<小学3年生 → 小学5年生>

- ・噴火、噴石、降灰、溶岩流という、富士山の噴火に関する項目がいずれも約8割と高かった。2年前とほぼ同じ傾向であるが、降灰について割合が1割以上高くなった。4年生時の富士山学習などで火山灰についての知識をえたことがうかがえる。
- ・地震と土砂災害についての回答も6割を超えている。

<小学5年生 → 中学1年生>

- ・同様に、噴火、噴石、降灰、溶岩流という、富士山の噴火に関する項目がいずれも約8割と高かった。噴火現象以外の項目はいずれも5割程度かそれ以下だった。
- ・全体的な傾向は2年前と同じで、噴石と降灰について1割以上高くなった。火山の噴火現象について学んだことがうかがえる。
- ・5割に近い回答をしたのは「土石流」と「地震」の2つで、大雨による早帰りや震度3程度の揺れを生徒が体験していることが要因の一つと考えられる。それに比べ「山体崩壊」「雪崩」「湖の水位上昇」は生徒にとって体験どころか見聞きする機会も少ないことから、意識が向いていないと思われる。

<共通>

- ・どちらの学年も噴火現象に対する理解が高まっている。5年生段階では理科でまだ学んでいないことを考えると、噴火について富士山学習で学んだことの表れといえる。
- ・噴火現象以外の項目については小学5年生より中学1年生のほうが心配なこととして挙げた割合が低い。さらに中学1年生では2年前の結果よりも今回のほうが若干低くなっている。

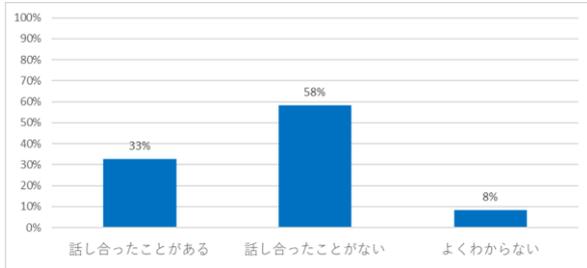
質問4① 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか

令和2年度

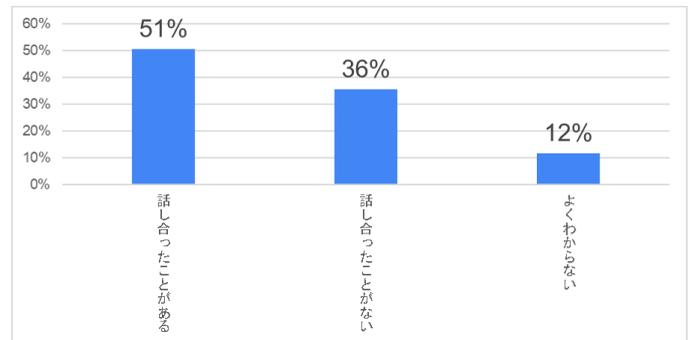


令和4年度

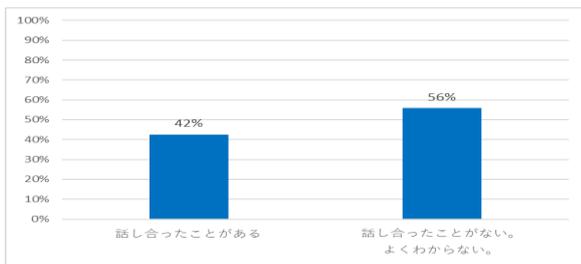
小学3年生



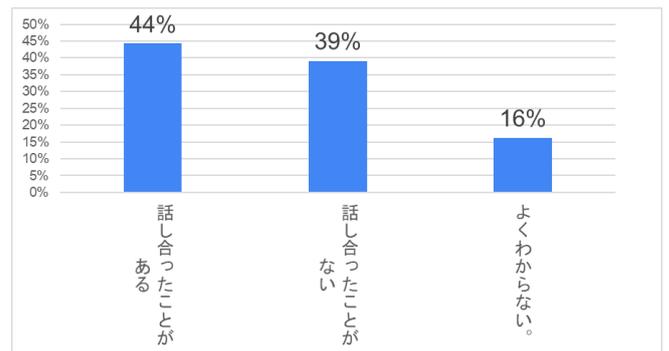
小学5年生



小学5年生



中学1年生



2年間での変化を見る

4-①. 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか

<小学3年生 → 小学5年生>

- ・令和4年度では「話し合ったことがある」と回答した児童が5割にのぼった。令和2年度に比べおよそ2割増加した。引き渡し訓練は毎年各校で行われているが、昨年度から富士山の噴火警戒レベルの上昇を前提とする訓練を取り入れる学校が増えていたり、噴火に関するPTA学習会を開催したりするなど、防災教育に富士山の噴火を取り入れてきたことが割合の増加に影響していると考えられる。

<小学5年生 → 中学1年生>

- ・令和4年度のアンケートで「話し合ったことがある」と回答した割合はおよそ4割で、令和2年度とほぼ変わらない結果となった。

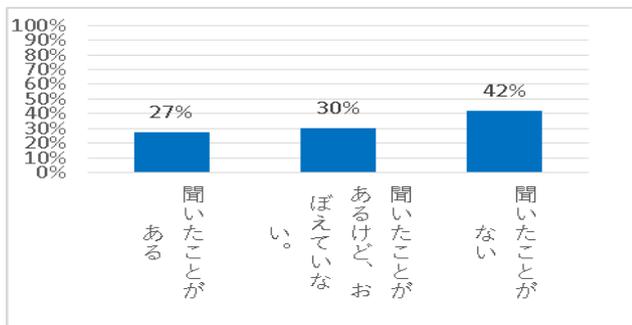
<共通>

- ・中学1年生のほうが若干低くなっているものの、どちらの学年も話し合ったことがある家庭の割合も全体の傾向もほぼ同じ結果となった。現在4割程度なので、今後の防災教育の取り組みにより増やしていくことができると思われる。

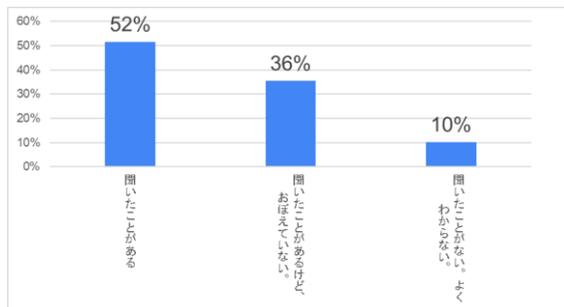
質問4② 富士山が噴火したときどうしたらよいか



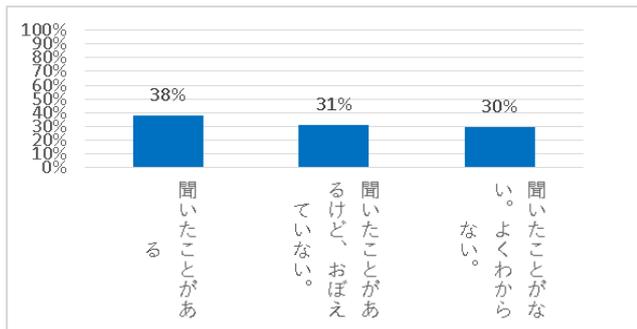
小学3年生



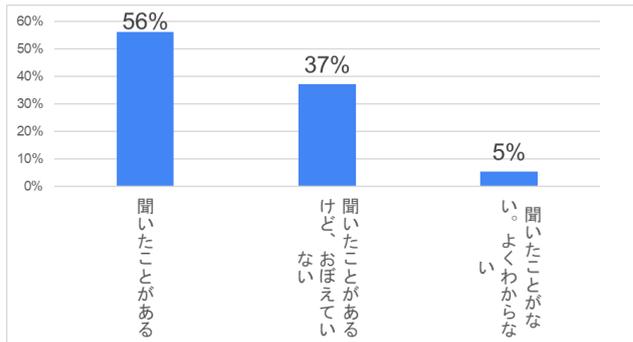
小学5年生



小学5年生



中学1年生



2年間での変化を見る

4ー②. 富士山が噴火したときどうしたらよいか。

<小学3年生 → 小学5年生>

- ・「富士山が噴火したときどうしたらよいか聞いたことがある」と回答した児童がおよそ5割、「聞いたことがない」と回答した児童が1割という結果になった。2年前に比べ聞いたことがある児童の割合が2倍になった。学習の成果がよく表れている結果となった。

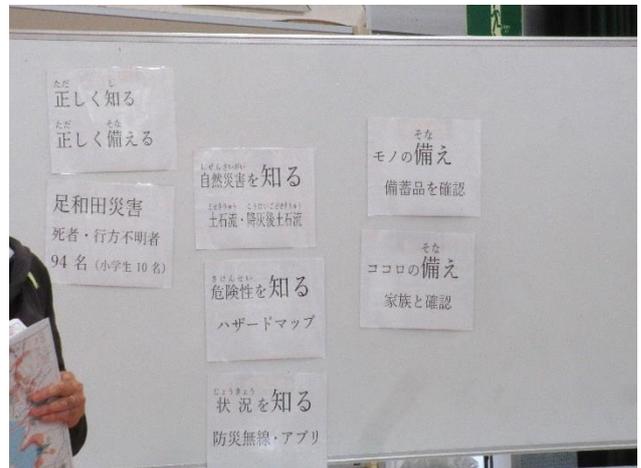
<小学5年生 → 中学1年生>

- ・同様に、「聞いたことがある」と回答した生徒が5割をこえ、2年前の回答から2割以上増えている。一方「聞いたことがない・わからない」と回答した生徒は2年前3割いたものが1割を切っている。学習の成果がよく表れている結果となった。

<共通>

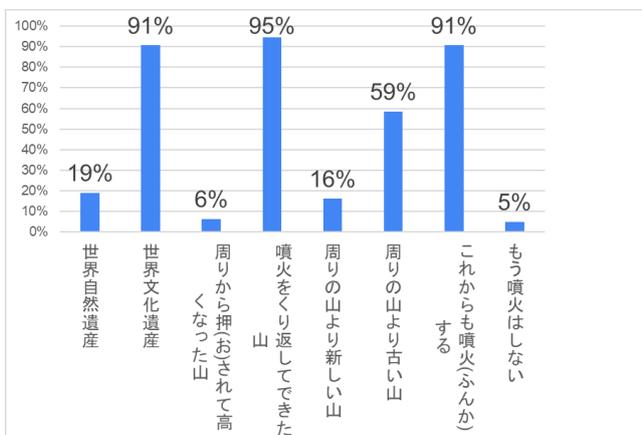
- ・どちらの学年にも「聞いたことがあるけれど覚えていない」と回答した児童生徒が3割以上いる。噴火した際に冷静に判断し行動できる児童生徒の育成のために、今後も防災教育に継続して取り組んでいく必要がある。

令和4年度アンケートから 中学校1年・2年・3年の違いをみる

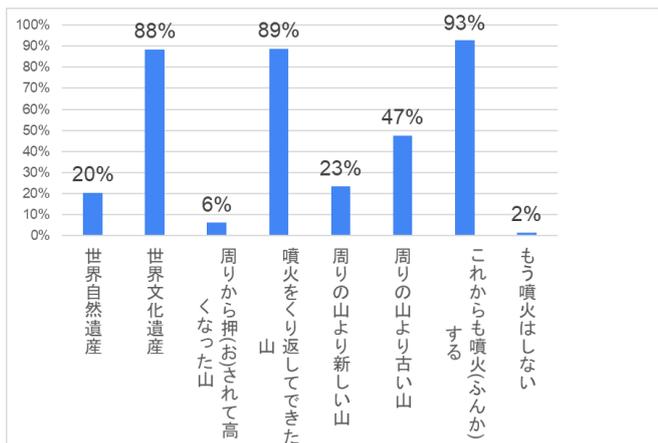


質問1 富士山の成り立ちについて

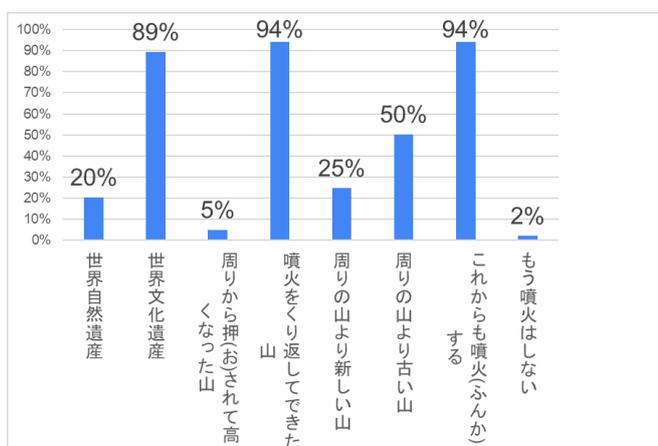
中学1年生



中学2年生



中学3年生



・富士山の成り立ちと世界遺産について、中学校の3年間を通して大きな変化は見られなかった。中学校1年次の知識がその後更新されないままであることを示している。

・複数回答可能な設問であるが、富士山が世界自然遺産であると回答している生徒がどの学年にも2割程度いる。

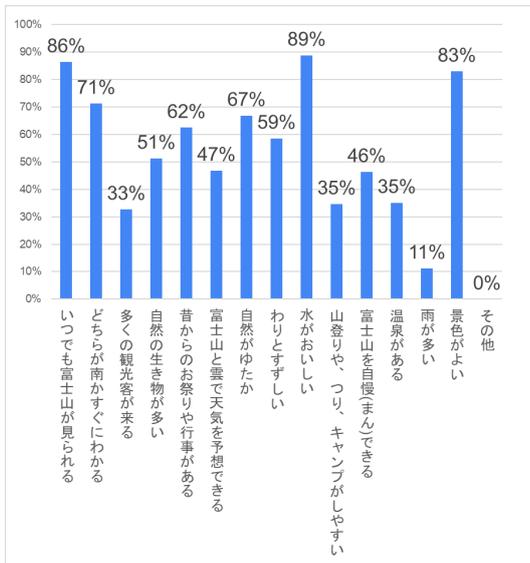
・どの学年にも富士山が隆起によって高くなったと回答している生徒が十数名いる。

・どの学年にも数名、富士山がもう噴火しないと回答している生徒がいる。

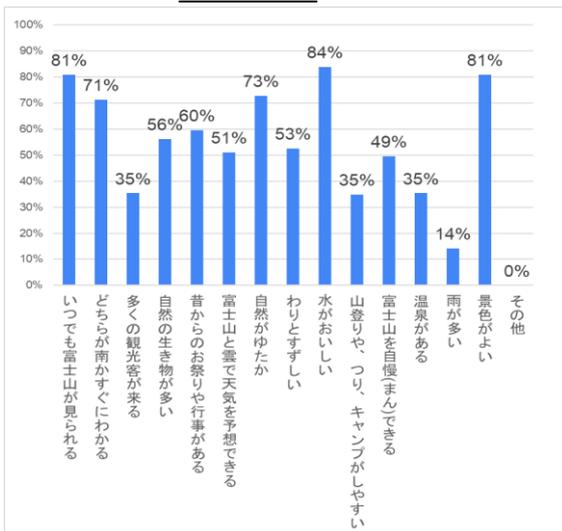
・富士山は周囲の山よりは新しく、噴火によってできた火山であるが、そのことは小学校から中学校を通して学ぶことはない。例えば1万年前も3000年前も児童生徒にとってはどちらも古いことに変わりはないだろう。富士山や御坂山地などの成り立ち(形成史)を学ぶことが必要かどうか考え、もし必要がないとしたらアンケート項目から除いてもよいと思われる。

質問2 富士山の近くに住んでいてよかったこと

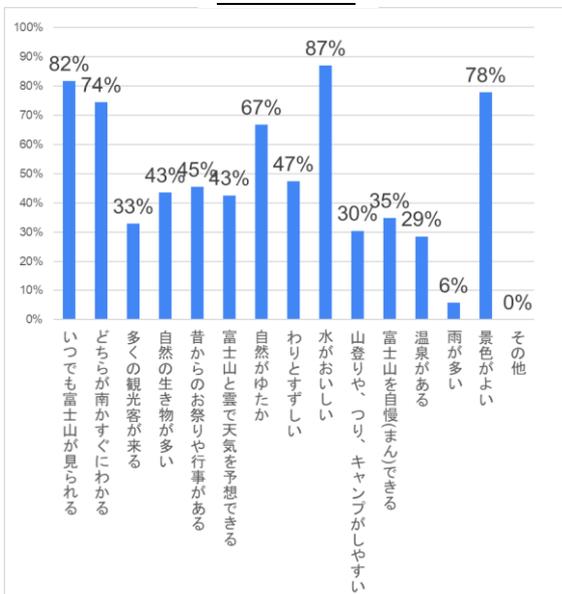
中学1年生



中学2年生



中学3年生

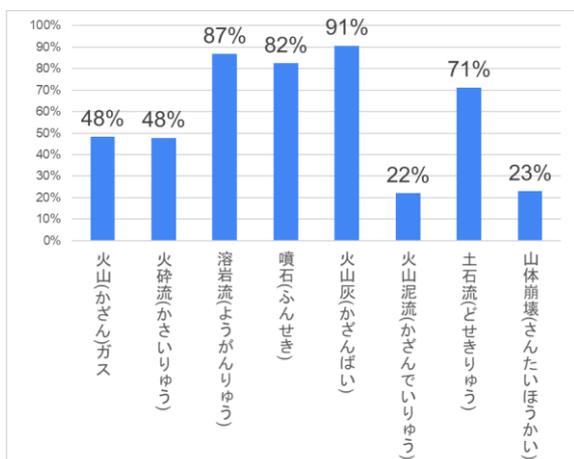


・富士山の近くに住んでいてよかったと思うことについても、中学校の3年間を通して大きな変化は見られなかった。この回答をして町の子どもたちの共通したイメージととらえることができる。

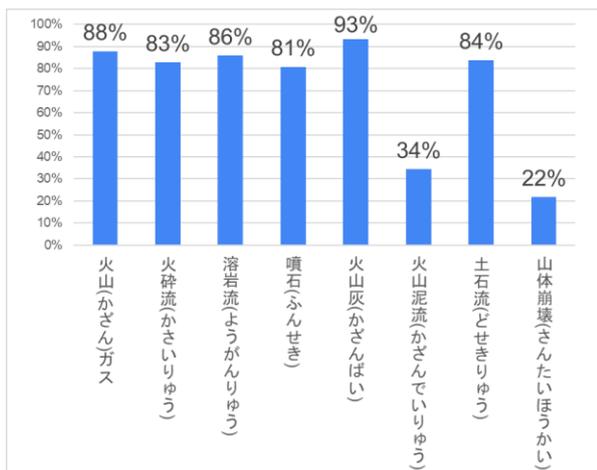
・自然に関する項目が中心となっている。児童生徒がどんな部分に町のよさを感じているのかをつかむためには、対象を文化面、生活面などに広げて問うことがよいかと思われる。

質問3 知っている火山の言葉を答える

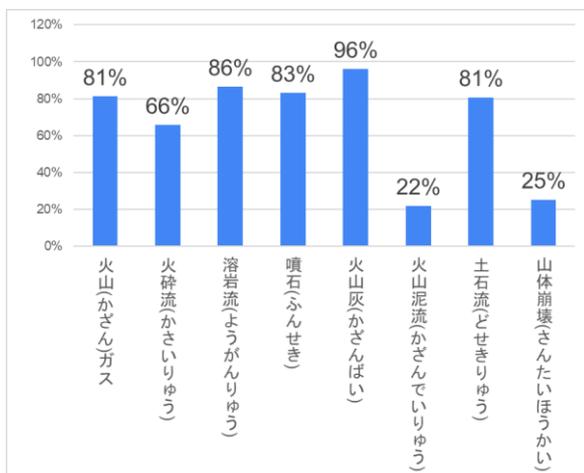
中学1年生



中学2年生



中学3年生



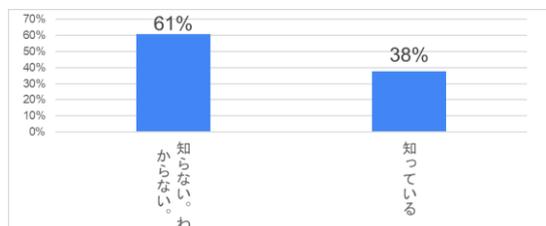
・火山に関する言葉については、中学2年で知っている割合が増加する。これは、中学1年の3学期に火山について学ぶためであると考えられる。

・火山泥流は2年生で若干知っている割合が増えるが3年生では1年生と同じ程度に低くなる。山体崩壊についてはどの学年も2割程度である。中学校で火山について学ぶ前の1年生と同様の割合であることから、授業で取り上げられる割合が低いことが予想される。富士山ではどちらも起こりうる現象であることから、富士山学習の一環として意識的に取り上げて教える必要があるかもしれない。

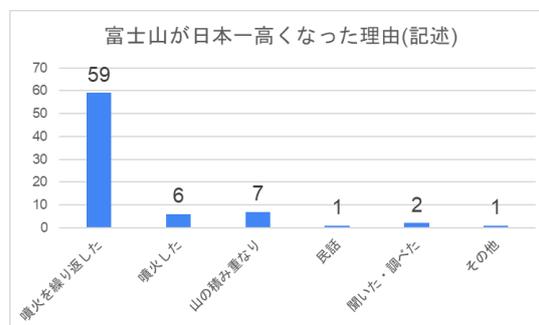
質問4 富士山が日本で一番高い山になった理由を知っているか。

※理由(記述)の数字は、回答した実数。割合ではないことに注意

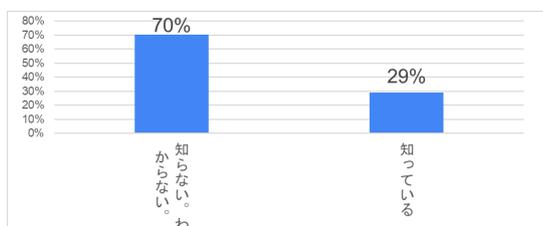
中学1年生



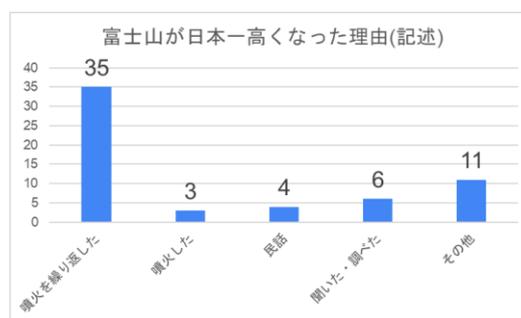
中学1年生



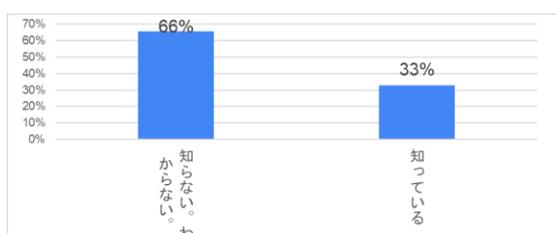
中学2年生



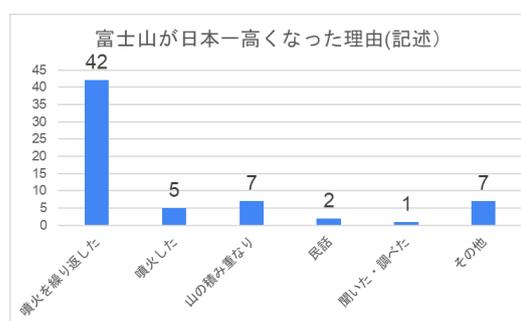
中学2年生



中学3年生



中学3年生



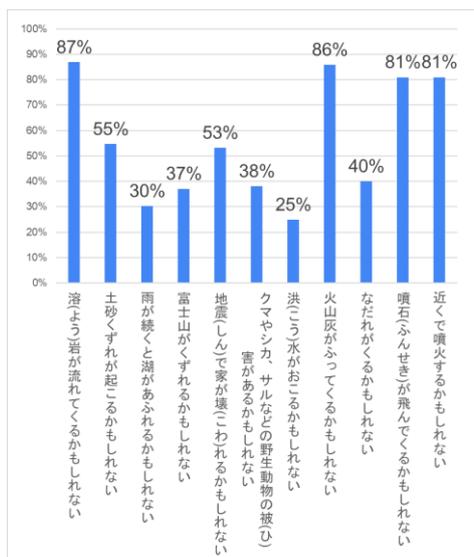
・ 3割～4割の生徒が「知っている」と答えた。

このうち、「噴火を繰り返した」と「噴火した」と答えた人数の割合は

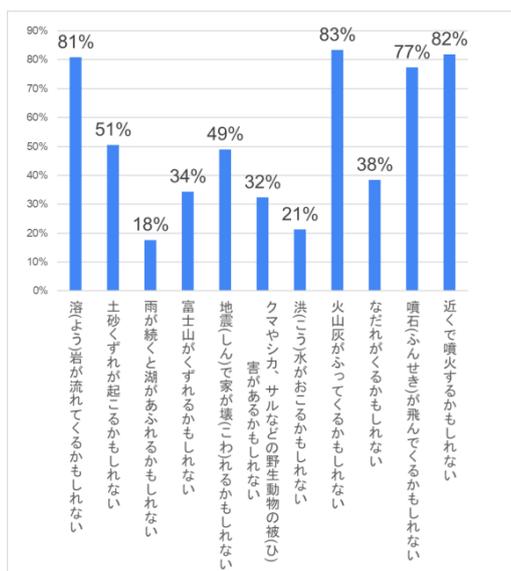
中学1年 86% 中学2年 64% 中学3年 73% であった。

質問5 富士山の近くに住んでいて心配なこと

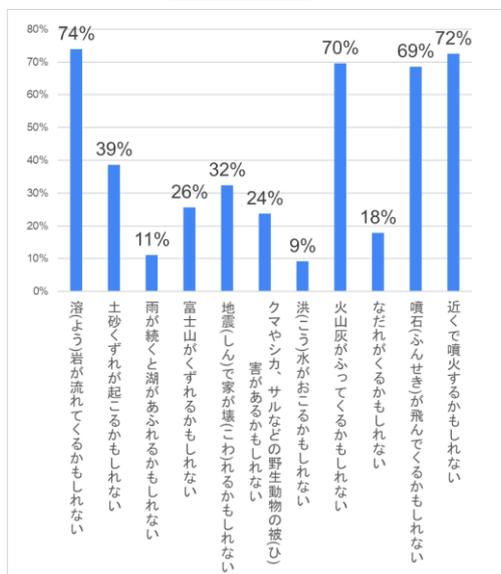
中学1年生



中学2年生



中学3年生



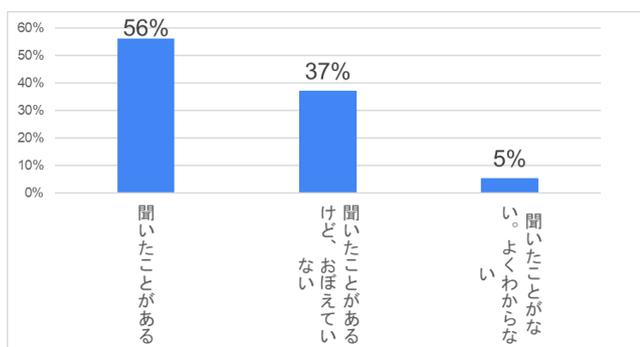
・3学年とも富士山の噴火に関して心配する生徒の割合が多い。

・中学1年生と2年生はほぼ同じ傾向を示す。

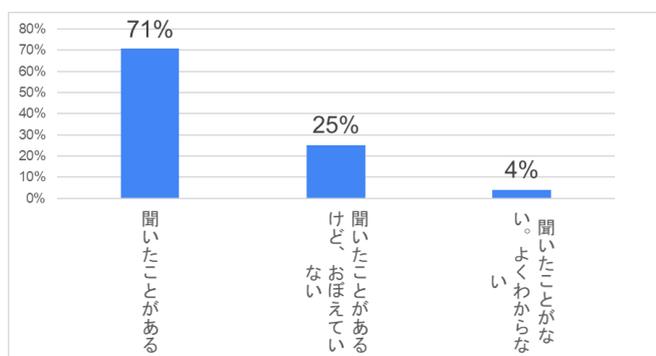
・中学3年生は中学1年生と2年生に比べ噴火に関する項目以外について心配する割合が低下する。噴火に関する項目についても他の2学年よりも低くなった。

質問6 富士山が噴火したときどうしたらよいか

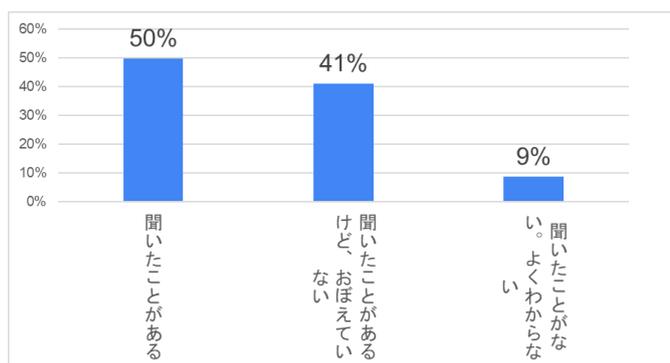
中学1年生



中学2年生



中学3年生



・「聞いたことがある」と「聞いたことがあるけど覚えていない」の合計がどの学年も9割を超えている。

・この時期の中学1年生の回答であることから、小学校から噴火について学んでいることがわかる。

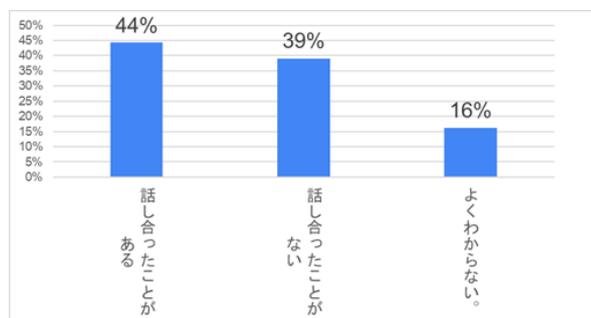
・質問3の火山用語と同様に、噴火したときの対応についても、中学2年で知っている割合が増加する。これは、中学1年の3学期に火山について学ぶためであると考えられる。

・「聞いたことがある」との回答について、中学2年で7割に上っている。中学3年で5割と、中学1年とほぼ同じ割合にとどまった。集団の違いによるものか、1年たって忘れてしまった結果なのかについては、来年度同じ質問をすることである程度つかむことができる。

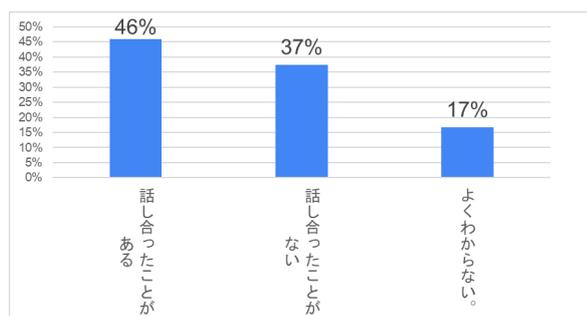
・中学3年生で「聞いたことがある」と回答する割合が増えることが望ましい。

質問7 富士山が噴火した際のことを家族で話し合ったことがあるか

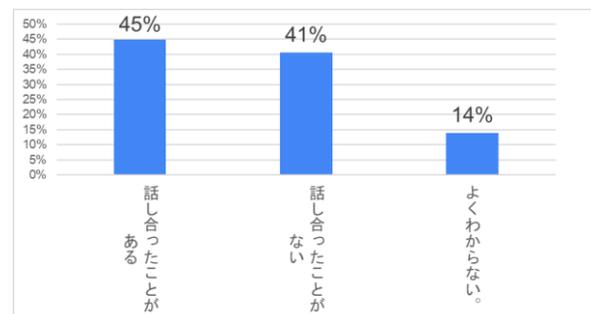
中学1年生



中学2年生



中学3年生



・話し合ったことがある家庭が4割～5割の間で、話し合ったことのない家庭が4割。3学年とも回答がほぼ同じ割合となった。

・中学生は発達段階からすると小学生のように庇護されるだけでなく、災害時、地域に戻れば共助の一員として働くことも求められる。ただ、緊急時家族が安否確認をする上では、家庭ごとに話し合い、大まかでも約束事をきめておくことは有益である。

あとがき

平成25年6月に、『信仰の対象と芸術の源泉』として富士山が世界文化遺産に登録されてから、今年で9年目になりました。美しく荘厳な姿から、時代を超えてさまざまな信仰の対象となり、また優れた多くの芸術作品に取り上げられるなど、まさに日本文化の源となってきた富士山。私たちには、この素晴らしい資産を保護し、確実に後世へ継承していく責務があります。この職責を果たすために何をすべきか、その一つとして富士山の価値について子どもたちと一緒に考え、学び、活動していくことだと考えています。

教育センターでは、町内の子どもたちが構成資産を通して富士山の価値を知り、富士河口湖町の歴史・文化を学ぶことにより、郷土に愛着と誇りを持ち、文化や自然を大切にする豊かな心を育んでいくことを願っています。本年度も、『富士山学習研究会』を中心に歴史・文化・自然・芸術・観光・災害(防災)等を体系的に学ぶ「富士山学習」に取り組んでいます。

近年、日本各地で台風や線状降水帯による水害、地震などの災害に見舞われることが増えたことから、学校の教育課程に防災学習が位置づけられ、その着実な推進が課題となっています。本町は富士山北麓に位置することから、噴火現象について学び、避難について考える学習も必要です。

そこで今回、町内の児童・生徒を対象に「防災アンケート」を実施しました。令和2年度に実施したものを土台に、今回新たに町内全ての中学1年生と3年生にも実施しました。アンケート結果について2年間の変化をみとることができ、また中学3年間の比較も行うことができました。各小中学校には、町の結果と自校の児童生徒の結果を比較し、分析してもらいました。

この調査結果が、子どもたちや先生方の「富士山学習」充実に向けての動機づけ資料となることを期待するとともに、今後、防災教育プログラムを学校、家庭、町ぐるみで計画的に取り入れていく一助になればと思います。

本調査に当たり、ご協力をいただいた各学校や児童・生徒の皆さんに深く感謝申し上げます。

富士河口湖町立教育センター研究員 (「アンケート調査・分析」)

持田 泰志 (船津小)	東 健次 (小立小)	在原あゆみ (大石小)
高尾 篤史 (河口小)	梶原裕一郎 (勝山小)	白須有紀子 (西浜小)
深澤 雅美 (大嵐小)	鷹野 満脩 (豊茂小)	窪田 一香 (湖北中)
佐々治智秀 (勝山中)	後藤みよ子 (湖南中)	渡辺はる美 (鳴沢小)

協力 富士山科学研究所 (「アンケート分析」協力)

久保 智弘 篠原 良典 林 龍樹

富士河口湖町立教育センター
担当 藤巻 桂吾
TEL 0555-83-3022
FAX 0555-83-3044
E-mail ed-center@kawaguchiko.ne.jp